林野庁への配置換え（昭和45年）

 営林署の担当区事務所といえば、警察署でいう派出所みたいなもので、組織の現場第一戦である。「石の上にも３年」というが、３年経過しても転勤（異動）の話はなかった。療での一人だけの生活は淋しかったが大学の通信教育を受けていたせいもあり、転勤の希望調書には、就職した２年目から「勉強したいため第１希望は林野本庁、第２希望は現任地」と、冗談半分・本気半分で書いていた。

　ヒョウタンから駒、昭和45年７月１日付で武雄営林署への配置換えの辞令が出た。その当時、武雄営林署の独身寮には４～５名の若人がおり、あぁ～これでみんなの仲間になれると喜んだ。７月４～５日頃、喜び勇んで同僚・友人のいる武雄営林署本署に移った。すると、わずかな荷物の紐を解く前に、今度は林野庁本庁への異動内示が出た。この時は驚いた。ノンキャリアに加え21歳かそこらの若造が東京の林野庁へ異動するなんて。駐在所の見習い職員が霞ヶ関の警察庁に転勤するみたいなものだ。自分自身も驚いたが周囲の人達はもっと驚いていた。

　７月下旬から始まる大学の通信教育のスクーリングを受けるべく準備をしていたのに転勤が重なりあわただしくなった。一日たりとも無駄にできず、辞令をもらった当日の夕方には東京に向けて発った。

　辞令が出た翌日には、林野庁に出勤した。通信教育のスクリーングの話を庶務担当に話すと、まだ着任の印鑑は押すな！と言われた。当時、地方からの転勤者に対しては２週間の赴任期間が許されていた。霞ヶ関の役所はまだまだノンビリした雰囲気の時代であったため、まだ赴任していないということで、その間は勉強に集中しなさい！という。２週間後に着任しても、年次有給休暇を有効に活用し、まさしく働きながら昼のスクーリングを受講することができた。

　21歳の青年の中央官庁での初めても配属先は、林野庁経済課というところで、林業に関する金融業務に関する仕事であった。農林漁業金融公庫、林業信用基金あるいは都道府県の林業金融担当者との連絡調整等々である。つい最近まで、国有林の木材を伐採し、山（現場）で収量を確認し、販売すると、買い受けた業者がトラックで運ぶ一連の流れを見ていると、何でこんな仕事をやっているのだろう？と思ったのが正直な気持ちだ。

　住居に決まった、品川区にある林野庁の独身寮「若葉寮」は当時寮生は50人ほど住んでいた。鉄筋のコンクリートの５階建てのアパート形式で、作り付けのベッド・タンス等今でいうビジネスホテルみたいな感じであった。一番嬉しいのは友達が近くにいることだ。夕食の時も風呂の時も通勤の時も寮生誰かが傍にいる。夕食の時、ちょっと背伸びして缶ビールを飲むのもいる。夜、10時以降は、余っている料理を食べても良いルールを根拠に自分達の階の娯楽室に運び酒盛りを楽しんだ。労働組合談義、芸能界、世相、ケンケンがくがく真面目に茶碗酒を楽しんだ。

　毎年年末の予算編成作業の時は、当然のことながら、雑用として活躍した。大蔵省に対する予算要求や予算編成作業がどのようなシステムで動いているかも知らず、一種のお祭り騒ぎであった。古き良き時代（？）で、都道府県の担当者もゾロゾロ顔を出し、一次査定がどうだの、二次査定がどうなの、待ち時間が長く上司が麻雀をやっているときなど、豚汁作りや焼酎のお湯割り作りの役割であった。今では、考えられないことだ。

　法律ができあがる課程での仕事にも携わった。当然、法律を作るのは国会の仕事であるが、法律案を提出するのは内閣（各省）である。法律案の草案の時から、農林水産省内の協議はもちろん、各省への調整・協議が必要となる。まだ20数歳そこそこのノンキャリア職員の私が、先頭に立って各省との調整・協議等を行うわけでではない。もっぱら、読み合わせ、清書（まだ、ワープロがなかった）、コピー、製本等の仕事である。国会用に通称「吊し」と呼ばれる想定問答集の作成、委員会が始まれば、担当国会議員からの質問に対する回答準備、回答案ができあがるまでのりん議決裁。歯車の一つであるが、法律が出来るまでのプロセスを経験できた。役所の中の一係員であっても、経験は財産になることを学んだ。